「釧路市家庭教育支援チーム」からの回答

【学校や社会福祉法人等との連携について】

Ｑ．　北海道教育大学釧路校との連携について、教員を目指す大学生が家庭教育支援にどのよう関わっているのか教えてほしい。また、連携の具体的な内容を教えてほしい。

Ａ．　大学生との関わりは、主に「ファースト・ステップ・プログラム」の活動で支援をいただいている。地域学校教育や特別支援教育を専攻とする大学の先生を通じて、大学生へ声掛けを行っていただき、大学生の都合のよい日時にサポートに入っていただいている。

大学生には、サポートスタッフと一緒に児童生徒への学習支援だけでなく、ものづくりやスポーツ等の活動にも支援いただいている。

支援対象となる児童生徒はコミュニケーション能力に課題がある傾向にあるが、年齢に近い大学生が丁寧に関わってくれることで、通常のスタッフには見せない表情・表現をするなど、新たな一面を垣間見ることもある。

教員を目指す大学生にとっては、教育実習などで学校現場に入ることはあっても、なかなか不登校児童生徒等に関わる機会は少ないため、学生の時期にこのような子供たちと関わりを持てることは、学生の将来に向けて教員の人材育成の観点においても貴重な経験の場であると考えている。

Ｑ．　社会福祉法人や大学、学校と連携し、幅広い活動を実践しているが、その連携や協働をどのように推進してきたのか。秘策やコツがあれば教えてほしい。

Ａ．　基本的には、日々の情報共有、連携・協働の積み重ねが重要である。例として、支援対象児童生徒の状況確認や今後の支援方策の検討等を話し合う場を月に１回程度設けている。

「連携」する上で重要なのは、連携先となる関係機関・団体間において、それぞれの役割を互いに認識した上で進めることである。例えば、「ＳＳＷは全てを解決する人ではない。」「関係機関・団体へ繋げるコーディネーターである。」といったように、それぞれの関係者間で役割を意識することが大切である。

Ｑ．　縦割り行政（組織）のなかで、上手く連携が取れていない現状である。よきアドバイス・ポイントを教えてほしい。

Ａ．　行政の業務においては、部署における縦割り感があることは否めないが、それぞれを繋げるコーディネート機能を有していれば、ある程度は解消されるものと考えている。

とりわけ、釧路市の家庭教育支援（不登校対策）に関して言えば、教育分野に社会福祉等の専門的な知識や経験を有するＳＳＷが配置されていることで、ＳＳＷが中心となり、関係機関・団体等との連携が円滑に進められるため、支援対象となる児童生徒とその家庭が置かれた様々な環境を的確に捉えた、適切で効果的な支援へと繋げることができている。

【支援の方法について】

Ｑ．「ファースト・ステップ・プログラム」事業の実施にあたり、指導者の人材確保をどのようにしているのか。

Ａ．「ファースト・ステップ・プログラム」は、釧路市教育委員会が社会福祉法人に対して業務委託契約を交わしており、基本的に日々の活動は社会福祉法人のスタッフが中心となって進められている。

そのため、本事業の関係者はそれぞれの業務の中で参加しているので、人材確保という面では大きな課題を抱えてはいないが、人材育成・資質向上という面では、日々の業務の中で、対象者の状況等の理解を深め、支援方法等を確認し合い、それぞれの経験値を高め、対応策の引き出しを多く持ってもらうようにしている。

Ｑ．定例会の回数やチーム員同士のつながり等の工夫を具体的に教えてほしい。

Ａ．上記のとおり、「ファースト・ステップ・プログラム」は業務委託という形で進めているが、支援対象となる子どもや保護者は、それぞれが教育委員会・学校が関わる個々のケースの支援対象者であることから、日頃から「こども家庭支援センター」に常駐するスタッフより、対象児童生徒の変化や違和感等の情報共有・連絡をいただきながら、また、児童生徒への支援計画・方策といったことも互いに確認した上で進めている。

その上で、月１回程度の定例会を設定し、直接の支援者以外の関係者からの知見や助言なども参考にすることで、より有効な支援を行うことができている。

Ｑ．「ほわっと」の①から⑨までの講座メニューはどのようにして決めているのか。

Ａ．「ほわっと」の内容は大きく３つの柱があり、一つ目は「生活習慣に関すること」、二つ目は「子どもの体力づくり」、三つ目は「子どもとの関わり方」であり、この３つの柱に沿って「小学校入学前の子どもがいる保護者向け」「小学生がいる保護者向け」「中学生がいる保護者向け」に分け、子どもの発達段階に応じたメニューを設定し、そのメニューを基に申し込みのあった団体と具体の講座内容について調整しながら進めている。

３つの柱を基本としながらも、より多くの保護者等に参加いただくために、保護者等が今、学びたい内容となることを心掛けている。そのため、講座終了後に必ず受講者から感想や意見をいただくためのアンケートを取っており、講座メニューの設定や、進め方等の検討材料の一つとしている。

【地域との協働について】

Ｑ．現在の活動は、教育委員会、家庭教育支援チームが中心となって行っているが、今後、地域住民と協働を考えているようであれば、どのような展望をもっているのか教えてほしい。

Ａ．家庭教育講座「ほわっと」の受講者は、小学校の保護者と比較して、中学校の保護者

の参加が少ない傾向にある。より多くの中学校保護者に参加してもらうために、学校・家庭・地域が連携した学校づくりを進めている「コミュニティ・スクール」の活動と連動させた講座の開催など、中学校の保護者の負担増とならないよう、地域住民と協働した既存の取組と関連づけたアプローチが必要と考えている。

ターゲット的視点による支援においては、いかに多くの社会資源を持っているかが鍵となり、「ファースト・ステップ・プログラム」も子どもたちを支援するための社会資源の一つである。そういった意味で、民生委員や児童委員との協働、民間福祉事業者との連携等も、今後の活動において重要なものになると考えている。

【その他】

Q．　今後活動してみたいことや改善したいことを教えてほしい。困っている問題もあれば教えてほしい。

A．　「ファースト・ステップ・プログラム」は、支援対象児童生徒数が増加傾向にあり、より多くの児童生徒を本事業へ繋げていること自体は成果ではあるが、拠点施設は市内に一か所のみであり、新規の児童生徒の受入れが困難な状況となっている。同時に、活動スペースの狭小化といった課題のほか、支援対象学年も小学校低学年から中学生までと幅広く、軽スポーツ等の活動内容によっては、児童生徒の安全面に対して、より注意を要する場面が出てきている。

併せて、コロナ禍における活動となれば、今まで以上に支援児童生徒に寄り添った丁寧な支援が求められるものと考えるが、マスクの着用やソーシャルディスタンスの確保等、表情が読み取れない中、感染症対策を講じながら支援を進めることに難しさがある。

何らかの問題により不登校となっている児童生徒とその家庭に対し、学校以外誰も関わることができていないような「取りこぼし」がないよう、「ファースト・ステップ・プログラム」をはじめとした、釧路市家庭教育支援チームの取組を積極的に発信していきたい。

Q．　公民館と連携して取り組んでいる活動があれば教えてほしい。

A．　特になし

Q．　「ファースト・ステップ・プログラム」事業の予算はどのように確保しているのか教えてほしい。

A．　行政による取組のため、あくまで予算があっての事業であり、本事業の成果・効果等を示すことが困難な部分があるが、そういった中でも、様々な場面で本事業の成果をアピールしていくとともに（昨年度の文部科学省表彰受賞など）、文部科学省補助事業（学校・家庭・地域の連携協力推進事業）を活用するなど、可能な限り財源措置を講じた中での予算確保に努めている。